＜立教大学池袋キャンパス・図書館百周年記念展示＞
『スパックマン・オーヴァトン文書』・『武藤重勝史料』・『図書館旧事務用品史料』展

立教大学図書館 100 周年にあたって

立教大学図書館長　司書課程教授　中村　百合子

池袋キャンパスの煉瓦造りの建物群は、100 年前の 1918（大正 7）年秋ごろに竣工，翌年 5 月には落成式が盛大に開かれました。クリスマスツリーに装飾が施される正門前のヒマラヤ杉はその後に植えられたもので，約 100 歳だということです。

みなさんもご存知のとおり，立教大学の歴史は明治維新のころにさかのぼります。アメリカ聖公会バージニア神学校を卒業した C. M. ウィリアムズ（Channing Moore Williams）師は清国，長崎，大阪で 10 年以上の準備を重ね，1873（明治 6）年のキリスト教禁止の高札撤去後に東京に移り，江戸監督（主教）として活動をはじめました。そして，翌 1874（明治 7）年 2 月 3 日，築地に私塾（のちの立教学校）を、1877（明治 10）年には東京三一神学校を開校しました。築地時代の立教学院には 1899 年に 2,204 冊の蔵書があり（『立教学院百二十五年史』），神学校にも図書室もしくは図書館があったらしいことが，立教大学へ移管された古い洋書に貼られた蔵書票の存在から推測されます。

築地から池袋への移転にあたり，煉瓦造りの図書館旧館（現在のメーザーライブラリー記念館）が建てられました。メーザーの名前は，この図書館建設に多大な貢献をされた米国実業家の名前に由来します。この旧館に，丹下健三研究室の設計による新館（現在，メーザー・ラーニング・コモンズが入る建物）が接続する形で建てられ，1960 年（昭和 35 年），立教大学図書館（本館）が改めて開館しました。その後，本館のほかに学部図書室・読書室などが設置されましたが，2001 年頃から自然科学系図書館，社会科学系図書館，人文科学系図書館という三つの学系図書館が開館し，総合的に運営されてきました。これが 2012 年 11 月 7 日，現在の池袋図書館に統合され，新たに開館しました。新座にも，1990（平成 2）年に新座にキャンパスが置かれ，現在の立教大学新座図書館が 1998 年に観光学部及びコミュニティ福祉学部の発足と同時に開館しました。

人間社会の歴史と同様に図書館の歴史が長いように，本学の歴史と共に立教大学図書館の歴史があります。私たちの真理探究の道のりを，たどってください。

築地時代の立教大学校・三一神学校。図書館もあったらしい。Library of Trinity Divinity College の蔵書票が多数残っている。

池袋校地に建てられた図書館本館旧館（メーザー・ライブラリー）図書館本館新館が建てられてからは，参考室として利用された。現在は，メーザーライブラリー記念館として使用されている。

図書館本館新館（丹下健三研究室の設計）。1960 年竣工。2001 年からは 3 つの学系図書館と共に利用された。現在はメーザー・ラーニング・コモンズとして使用されている。

池袋図書館（18 号館、ロイドホール）2012 年三学系図書館を統合して全面開館。延床面積約 20,000 平米。

『スパックマン・オーヴァトン文書』（学院史資料センター所蔵）

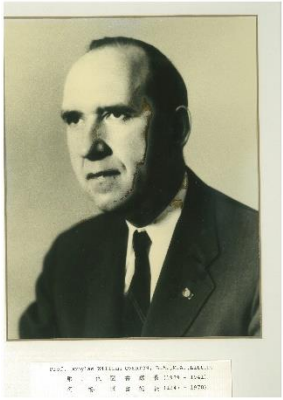
初代館長に任命されたスパックマン（Harold Charles Spackman）氏は，英国生まれ 1910 年にケンブリッジ大学卒業，1914 年に来日，聖公会の司祭，神学院の教授として図書館の運営も任されていたようです（『図書館雑誌』126 号）。1920 年に出来たばかりの池袋キャンパスで，チャペルと向かい合わせの新図書館の初代館長に任用されることになりました。

スパックマン館長は旧い分類表を改めてアメリカ図書館学が開発したデューイ分類表（ＤＤＣ）を採用し，聖公会の慈善組織である「ペリオディカル・クラブ」に働きかけて蔵書の充実を図るなど精力的に活動しました。学院史資料センター所蔵の『スパックマン文書』には多量の米国内宛の図書寄贈依頼状・礼状などが残されています。

スパックマン館長
1920-1939

スパックマン館長が就任してまもなく，1923 年に関東大震災が起きて築地周辺は火災で焼失し、中学校が池袋に移転しました。池袋キャンパスでも時計台のモリス館や図書館も地震で多大な被害を被りましたが、再びメーザー(Mather：発音はマザー，マーザーらしい)家からの資金で改修されました。その際の記念のプレートが、メーザーライブラリー記念館の階段の踊り場に今でも残っています。

スパックマン館長には進取の気性があったようで、アメリカで 20 世紀初頭に発達した「図書館学」に通じており、立教大学で日本の他大学に先んじて図書館学を開講することを思いつきました。その草案が『スパックマン文書』の中や図書館協会の記事に残されています。しかしそうした努力も戦争の足音が近づくにつれ困難となり、母国イギリスも空襲に遭うなど夫人と帰国することになりました。館長として最も長い 19 年間を立教大学に奉職し，退職後には名誉図書館長の称号を授与されています。



オーヴァトン第 2 代館長
1939-1941

第二代館長オーヴァトン（Douglas W. Overton）氏は聖公会宣教師，1915 年ニューヨーク生まれ，ハーバード大学で日本史を学ぶ。1936 年に立教大学教授として来日し館長と共に蔵書の拡充に務め，1939 年から 1941 年にかけて第 2 代館長職を開戦の直前まで務めて帰国しました。戦後は米国領事館副領事として横浜・東京に勤務、日米関係の著書もあり知日家として知られ、1947 年に立教大学図書館の名誉館長となり，戦争直後の図書館の改装のために三洋商会会長森伝次郎氏に費用の寄付を懇請して実現し，図書館は内装を新たにして再出発することができました。

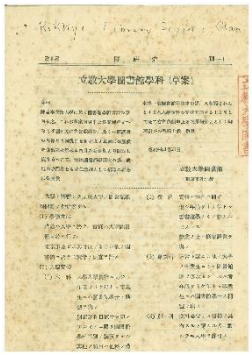
スパックマン館長は、戦後はフィリッピンのアンデレ神学校で教鞭を取られていましたが 1951 年に英国への帰路に日本に立ち寄られ，立教も訪問されて戦前も図書館に勤務していた武藤重勝副館長と旧交を暖められました。（『立教大学新聞』79 号による）

立教大学池袋キャンパス全体については、メーザーライブラリー記念館でも 100 周年記念展示を行っていますので，ぜひ階段踊り場の記念プレートにも目をとめてください。

人気のあった旧館閲覧室

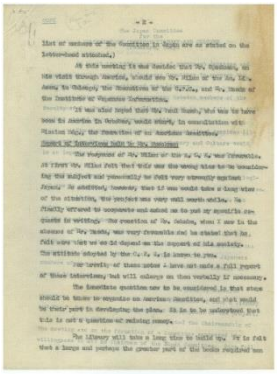
階段踊り場にあるメーザー（マザー）氏の記念プレート

『スパックマン・オーヴァトン文書』は、2011 年に図書館から学院史資料センターに移管され、仮目録が作られています。資料の内容は、1920 年代から 1941 年まで、内容には寄贈図書の依頼・送付リスト・礼状が主ですが、図書費予算や報告などの冊子も含まれています。BOX7 個に仕分けされた 670 の封筒に保存されています。

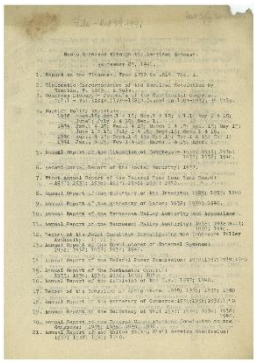


『図書館研究』2 巻 1 号 1929 年に公表された「図書館学科草案」。本科は他と同じ 3 年の年限で図書館学士を取得。ラテン・ギリシャ語，タイプライターなどの科目もあった。

『立教大学図書館和書件名目録』1929 年 10 月発行。ガリ版刷り。和書の検索のため，デューイ分類表の大項目を日本語に訳して作成したと思われる。

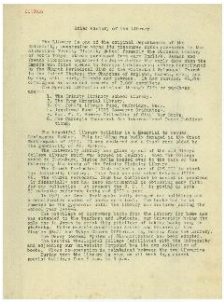


立教大学附属「米国文化研究所設置計画」。立教大学図書館内に「米国文化文庫」を置きたいとしている。1939 年(昭和 14 年) 2月 立教大学学長遠山郁三，総長ライフスナイダー。



米国大使館からの寄贈書リスト 1941 年 9 月 23 日付 Diplomatic Correspondence of the American Revolution by Wharton 1889 14vols. など 59 点

マサチューセッツ州ペリオディカルクラブ Church Periodical Club 立教大学宛の寄贈蔵書票。保存書庫が所蔵する洋古書に多く貼付されている。



立教大学図書館略史［1939］。立教大学図書館が聖三一神学校に寄贈されたコレクションについても述べられている。

『武藤重勝史料』
（2001 年度図書館移管資料，学院史資料センター所蔵）

“立教のモットーは「紳士になること」である。校舎前の芝生を囲む図書館とチャペル，この二つこそ知識の母，魂の母である。東京に官学は多々ある。しかしその中で立教の鐘の鳴る高塔は何を語るか。自由の扉は常に開かれている。（『受験と学生』研究社 1 月号 1927 年，受験案内，武藤重勝より）“

武藤重勝氏は 1904 年（明治 37 年）台湾で生まれ宮崎県高鍋町で少年時代を送り 1925 年に立教大学予科に入学，27 年に文学部哲学科に進学，卒業後 1930 年に本学図書館に就職しスパックマン館長の下で業務にあたりました。1945 年に疎開のためか退職して京都や高鍋市で英語・社会の高校教諭を勤めました。1949 年 4 月より再び立教大学司書に任用され直ちに副館長を命じられ，1969 年 3 月まで通算 36 年に渡り本学で精勤されました。（寺﨑昌男「武藤重勝：クリスチャン・詩人であり続けた図書館人」『立教学院史研究』2 号参照）

『武藤重勝史料』は，学院史資料センターでは『2001 年度図書館移管資料仮目録』として仮整理され，番号 1 ～80 は武藤副館長が記録した業務および個人の日記、番号 81~105 は図書館新館建設を念頭に参考資料を集めた記事のスクラップブックとなっています。

日記には、業務記録と個人的な記録が混ざっていますが、図書館本館新館がオープンした 1960 年 12 月 22 日の記録には、下記のような記述があります。

“本日，今日は落成式で多忙。・・・新館の披露式，校内人，150 人あまり，外来者を交えれば 300 人位もあったろうか。3 階で reception。図書館関係者，多数来訪。終わって・・・慰労会をする。”

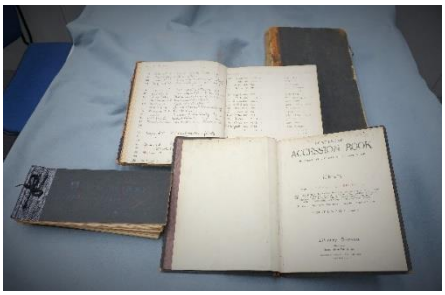
武藤重勝史料　①日記

また，新図書館の落成前から立教大学図書館や，文学，教育に関する社会面の記事などを集めた新聞記事スクラップも「武藤重勝史料」の約半数を占めています。

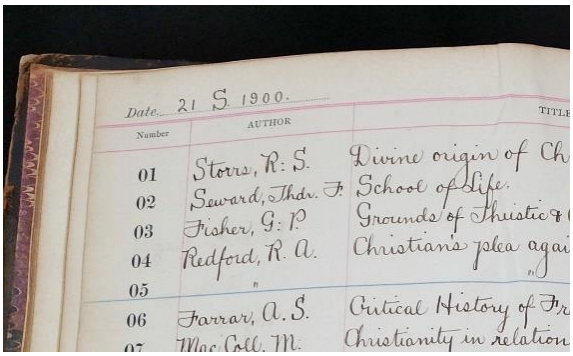
武藤重勝史料 ②図書館関連記事スクラップブック

『図書館旧事務用品史料』
（現在：図書館所蔵，学院史資料センターへ移管予定）

（１）東京三一神学校時代の登録原簿と「図書館書体」



現在は使用されていない，蔵書の登録原簿が何冊か図書館に残されています。最も古いものは 1900 年（明治 33 年）9 月 21 日の日付で 1 番から書き始められている，19 世紀のアメリカ製の珍しい図書館事務用品です。『ALA 基準登録原簿 ALA Standard Accession-book』というタイトルが付いており，「図書館書体」（Library-hand）によって著者名や署名が筆記されています。



この書体は一般的に直立書体（upright-hand）と呼ばれるもので，手書き文字の読みにくさを解消するものだったそうです。またこの書体は，コロンビア大学で図書館学の創始者と言われるメルヴィル・デューイが考案したものでした。

凡例に従って，きっちり 1 行 1 冊で記入された登録原簿は，スパックマン館長以前の神学校の関係者によるものと思われます。ちなみにタイプライターは，1884 年に発明されています。

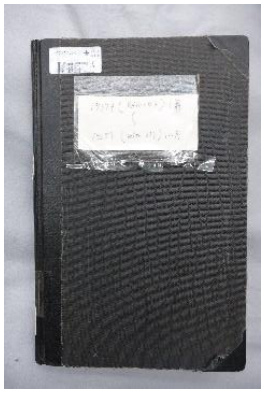
※竹内悊「1900 年の登録原簿」*LISN 163* 号 *2015*（キハラ（株））を参考にさせていただきました。

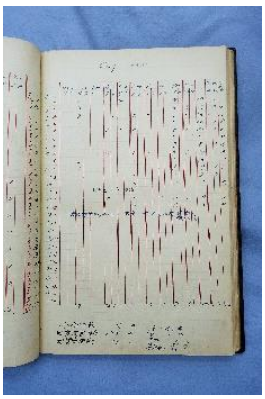
（２）貸本図書月表　1939 年 1 月～1958 年 12 月

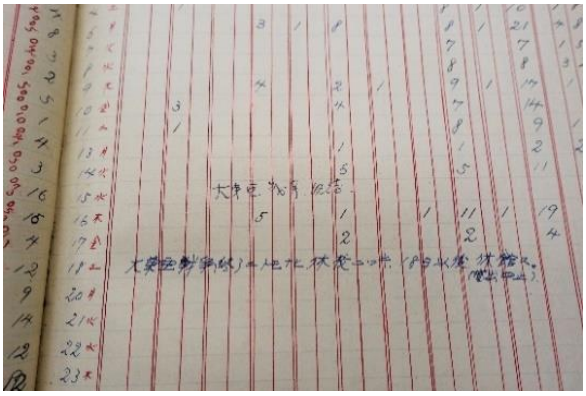
1960 年に図書館本館新館ができる前の、図書館本館旧館の入館者数・閲覧図書冊数などの記録が残されています。ちなみにスパックマン館長もいた 1939 年 1 月は、開館日数 20 日，閲覧図書 839 冊、戦時中の 1944 年 1 月は開館日数 20 日，閲覧図書 32 冊，閲覧者 29 人です。

下記の写真にあるように，終戦前日は 11 冊の図書利用，8 名の利用者があり、8 月 18 日から 9 月末まで閉館しています。日付の最後の 1958 年 12 月には開館 21 日、貸出図書 1,268 冊，入館者数 7,524 名となりました。現代の私たちが想像すると，終戦となるまで空襲のあった東京都内で開館していたのが信じられないほどです。

また戦後は，図書館本館新館ができる直前まで，高度成長期を迎えて在籍者数の増大や蔵書の拡大のため，いかに図書館が狭隘化していたかがわかります。







第二次世界大戦終戦日の図書館利用者